

平成21年 6月 1日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520476

研究課題名（和文） 英語習得用多読的シャドーイングの研究と普及

研究課題名（英文） Study of shadowing with extensive reading for English learners

研究代表者

岡山 陽子（OKAYAMA YOKO）

茨城大学・大学教育センター・准教授

研究者番号：20396592

研究成果の概要：本研究では、授業でシャドーイングを実施し、学生のシャドーイングがどのように変化したかをビデオ撮影などで記録した。その結果、学生の発音がCDの英語音声に近づき、より自然な英語に近づいていったことが確認された。しかし、ただ、シャドーイングを行うだけではなく、CD音声を聴きながら、テキストを見て音読や黙読をする、という活動も加えることにより、学生にとって取り組みやすくなることも分かった。また、テキストのデータベース化は、当初の予測よりも困難だということも分かった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育、多読、シャドーイング

1. 研究開始当初の背景

(1) シャドーイングとは、本研究分担者の酒井邦秀によれば「耳から入った音をそのまま口から出すこと」である。英文を聴いてそのまま口から出して行く。影のように行くとシャドーイングだと言われているが、1970年代にはすでに、日本の同時通訳の草分けである斉藤美津子によって通訳訓練法として開発されていた。近年では、この通訳訓練法を応用して一般の英語教育に取り入れる方法が広まってきた。しかし、この従来型のシャドーイングでは、通訳志望ではない普通の学生への本研究代表者岡山の実践例

では、長時間の練習は難しく、また、練習した英文は自然な発音で言えるようになるが、初見のものを読むと元の発音に戻ってしまっていた。

(2) 多読は、Stephen Krashen, Richard Day, Julian Bamford などにより研究されてきたが、授業外活動であり学生の読書量は年間数万語程度だった。それに対して、本研究分担者の酒井は英語を膨大に吸収できる多読法を7年間研究実践し、大きな効果を上げてきた。それは、酒井等の提唱してきた多読3原則に支えられている。つまり、①辞書を使わ

ない、②わからない単語は飛ばす、③つまらなければ、やめる、というものだ。マイクロなところにこだわらず、マクロなところから本の内容をつかんで、本を楽しむ点を主眼にして、非常に易しい楽に読めるものから始める。従って、気楽に続けられて、いつの間にか、子ども用のペーパーバック、そして、大人用のペーパーバック、あるいは、学術書などを読めるようになっていく、というものである。

酒井は、この多読方式を基に、多聴の実践も始めた。この多聴の核がシャドーイングである。この酒井の実践方法によれば、学生は、初見の英文でも自然の英語に近い発音で読めるようになった。

(3) そこで、酒井が実践した方法を用いて学生のシャドーイングがどのように変化するのか、研究してみたい、と考えた。つまり、このシャドーイングでは、最初から、正確さは、追及しない。言えないところは、もごもご、で良い。ただし、時間は長く行う。また、その際、使用することになるシャドーイング教材についても、データベースとして公開し、英語教員、英語学習者に貢献できれば、と考えた。シャドーイング教材は、一般的に高価な上、購入前の視聴も困難で英語教員や英語学習者は、選択の際の判断基準がなく困っているという声が当時が多かったので、その手助けになれば、と思った。

2. 研究の目的

(1) 多読的シャドーイングを英語授業に導入し、学生のシャドーイングの過程と変遷を質的手法で記述をし、その成果を検証すること。

(2) 多読的シャドーイング用教材を発掘・研究し、データベースを作成し、インターネット上で公開すること。

(3) シャドーイングの効果が判明すれば、その方法を普及すること。

3. 研究の方法

(1) 質的手法：

シャドーイングを授業内で実施し、学生の様子を質的手法で記録した。

茨城大学では、多読多聴講座を教養総合科目（選択授業）として開講している。この講座は、社会人にも公開されており、岡山・上田が担当している。2007年度は、「簡単な絵本からペーパーバックへ100時間シャドーイング講座①」を前学期に、同講座の「②」を後学期に開講することができた。2008年度には、「簡単な絵本からペーパーバックへ100万語多読講座①」を前学期に、同講座の

「②」を後学期に開講した。

この講座では英語多読・シャドーイングを通して学生の英語力向上を目指している。

半期2単位の科目で、前学期は、午後6時から8時15分までの2時間15分の授業を10回実施。後学期は、午後4時20分から午後5時50分までの通常の90分授業を15回実施している。また、この多読多聴講座以外で、岡山・上田が担当している英語クラスでもできる限り多読・多聴を実践したが、一般クラスなので、普段のシャドーイングの様子のビデオ撮影は行わなかった。

当該研究でのシャドーイングは、クラス全体で一台のCDプレイヤーで一斉に行うのではなく、時間帯は同時でも、学生は、ひとりひとり個別に行う。従って、個人用CDプレイヤーがクラスの学生数だけ必要で購入した。教材用CDも学生が十分使用できる数のものを購入した。当該研究開始前に、多読・多聴は実践していたが、当時は、個人用テープレコーダー中心に行っており、CDプレイヤー、CD教材は、限られた数しか揃っていなかった。それをこの研究費補助金で学生数に十分対応できるように揃えられた。

多読多聴講座の学生には、科研費補助金を獲得した研究を授業で実施したいこと、と、その研究内容を学期開始時に説明し、ビデオ撮影、録音、アンケート回答に同意を得た。2007～2008年度の各クラスの人数は、社会人も含めて約40名から60名だった。従って、延べ約180名の学生が当該研究に参加した。この学生は、1年生から卒業を控えている学生まで多岐にわたった。

各授業の際、教員は、シャドーイング時に、学生一人一人を観察して当の学生と意見交換をし、メモとして残した。また、アルバイトを依頼し、個々の学生のシャドーイングの様子をビデオで記録してもらった。また、学生には、毎回コメントを提出してもらった。学期末には、シャドーイングテストを行い評価した。このテストでは、学生が一人一人教員の前で、1分間のシャドーイングを行った。テスト用教材は、学生に、原則としてMouse Talesから自分の好きな話を選んでもらった。

授業の成績評価としては、リーディングテスト（読速と理解度の計測）とシャドーイングテストの評価を用いた。

研究2年目には、当該補助金にて、ブルーレイディスクレコーダー（撮影した映像を編集できる機械）を購入できたので、学生別に映像を編集し、授業開始時、途中、授業終了時、とまとめて、各学生のシャドーイングの

様子を比較検討できるようになった。

(2) 量的手法：

シャドーイング時には、学生にシャドーイング教材のデータベース作成のために、アンケートを実施してそのデータを分析する。

実際に、授業でシャドーイングを行う際には、学生にアンケートを実施して、回答を集めて、各シャドーイング教材について、分析検討を行った。

4. 研究成果

(1) 全体の概要：

2007年度、2008年度ともに、岡山・上田は、多読と多聴を授業内で実践した。延べ180名余の学生のシャドーイングの様子を観察し、ビデオ撮影をした。

その結果、この授業は半期単位の授業だったが、多くの学生のシャドーイングが変化した。授業開始時に比較して、授業終了時には自然な英語の発音に近くなっていった。また、シャドーイングだけではなく、読み聞かせ（CDの音は聞かずに自分で本を音読して相手に聞いてもらう）活動でも、発音が滑らかになっていった。ただし、それらの学生がすべて、シャドーイングの発音が滑らかになっている、という自覚を持たなかった。教員が聴き、ビデオで比較すると変化があったが自覚には至らなかった学生も多かった。

ところが、2008年度後学期には、2007年度に引き続き登録した学生や、前期と後期を続けて登録し授業に出席した学生がいた。また、前学期に岡山・上田が担当した英語クラスでシャドーイングと多読を経験し、後学期に多読多聴講座に登録をした学生がおり、それらの学生が計15名となった。この学期は、全体で60名という学生数となったので、初心者の学生とすでに経験のある学生を分けた結果、岡山が経験済みの学生15名を担当することになった。このクラスでは人数も少なかつたせいもあってか、多読・多聴に熱心に取り組んだ。結果、学期末には、ほぼ全員の学生が、多読についても、シャドーイングについても、自分自身で明らかな変化を感じたようだった。シャドーイングに取り組み始めた当初は、いろいろなテキストを試しても、「もごもご」シャドーイングだった学生もいたが、この学期が終了するころには、シャドーイングが英語らしく聞こえるようになってきた。

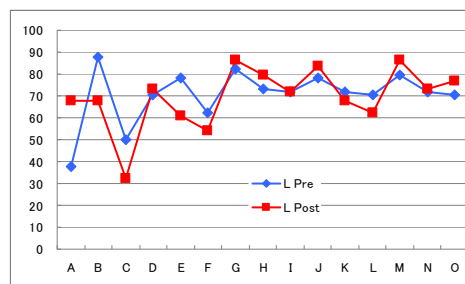
多読多聴授業では、最初の年は、多読を行ってからシャドーイングを行っていた。しか

し、多読が進んでくるとなかなか本を手放さなくなり、シャドーイングを授業開始と同時に始め、多読に移るようにした。この順番のほう時間が管理が容易になった。

(2) SLEP テストの結果：

当該研究開始時の予定にはなかったが、学期開始時と学期終了時にSLEPテストを実施した。その結果、1年間、多読と多聴を経験した学生は以下のようになった。

① リスニングテスト部門



N=15

Pre Test : 平均 70 点 (100 点換算)

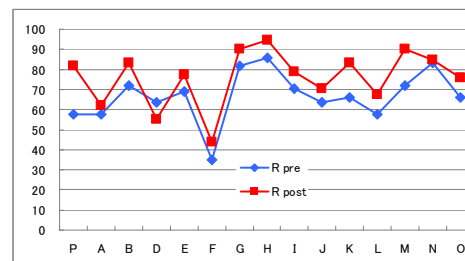
Post Test : 平均 70 点

プラス 8 名

プラスマイナスゼロ 1 名

マイナス 6 名

② リーディングテスト部門



N=15

Pre Test : 平均 67 点 (100 点換算)

Post Test : 平均 76 点

プラス 14 名

マイナス 1 名

この結果によれば、リスニングでは効果が見えない。リーディングでは、ほぼ全員が伸びている。学生数(N)は15人、と少ないが、ほぼ全員のリーディングの点数が伸びている、ということがペーパーテスト上でも示された。ただし、この結果は、多読とシャドーイングの相乗効果だと思われる。多読だけのクラスとシャドーイングをプラスした場合の違いについては、今後もさらに研究を続ける必要があるだろう。

(3)シャドーイング実践で大事な点：
2年間4クラスの学生の様子、また、ほぼ1年以上学習した学生の様子、コメントから、私たちが実践してきたシャドーイングの方法では「シャドーイングなどの実施方法」と「教材選択」が学生がシャドーイングを効果的に続けるためには、非常に大事な点だと思えるようになってきた。

①シャドーイングなどの実施方法：

これは、「音」と「文字」にどのように接し慣れていくか、という問題のようだ。現時点で考慮すべき点は、シャドーイング（テキストなしでCDのみを聴き、追いかける）と、聴き読み活動（CDを聴きながらテキストを目で追い、音読あるいは黙読する）との兼ね合いという点に集約されるかと思われる。

最初、私たちの授業では、シャドーイングのみを実践していた。テキストは、音なしで、別途に多読のテキストのようにして読んでもらっていた。しかし、学生へのアンケート結果では、シャドーイングが多読と比較して難しい、という声が圧倒的に多かった。1年目後学期（2007年後学期）には、一部の学生は、自然に、CDを聴きつつ、テキストを見て音読をするという活動を始めており、とても楽しい、ということだった。

そこで、2年目には、シャドーイングだけではなく、CDと一緒にテキストを見て、目からも情報を入れる活動を加えた。この活動は、学生に評判が良かった。内容が良くわかり、楽しい、という声が聞かれた。この活動では、当初、発音が日本式発音のままになるのではないかと、という懸念があったが、シャドーイングを先に行っていくこと、また、聴き読みを行ったあとは、本を見ないシャドーイング活動も行うことにより、発音は、CDに近い発音にしていくことができるようだが、今後さらに研究が必要である。

また、この点も、今後の研究がさらに必要だが、ある程度の期間（少なくとも1年間）、シャドーイングなどの多聴に触れることにより、どんなに日本語の影響が強い発音をしている学生の発音でもCDの発音に近く、つまり、英語の自然な発音に近づいていくようだ。

当該研究ではビデオによる映像は記録してきたが、残念ながら、他の学生の声などが入り、音声がクリアだとは言えない。できれば、今後、音をきちんと録音できる器機を購入し、学生のシャドーイングの音声を比較で

きるソフト等を用いて、比較検討ができれば、さらに、明確な分析ができるのではないかと、思う。

②教材の選択：

シャドーイング教材の選択は非常に大切で、それにより、学生のシャドーイング指導ができる、とこの2年間の実践結果から考えている。

当該研究で行ったシャドーイング方法では、教員は学生の発音を一切直さなかった。しかし、学生の発音が自然な発音になるように、各学生に合ったテキストを選択し、そのテキストによるシャドーイング練習を通じて、学生の発音が変化することが、ほとんどの学生で見られた。半年では明確ではなかった発音の変化も、1年経った学生では明らかに変化していた。

また、教材の選択により、シャドーイング練習に、山や谷を作ることができる。当初、多読でも多聴でも、易しいものから、難しいものへと、なだらかに難度を上げていくことが良いのではないかと、考えていたが、それだけだと、学生が進歩を実感しない。進歩が実感できないことには、熱心に取り組めないようだった。

そこで、逆に、山あり谷あり、を作ることにした。つまり、最初は、比較的難しい教材を用意する。その教材に取り組んでから、最も易しい教材を準備する。このように、最初は、ある程度の難しさの教材を提供することにより、最初から非常に平易な教材を提供していたときに比較して、こんな教材は易しすぎる、と熱心に取り組まない学生がいなくなった。ただし、この方法を行う際には、難しすぎる教材はいつでもやめてよい、ということをして学生に徹底しておく必要がある。そうしないと、難しい教材に無理に取り組む学生が出てくる。この2年の経験より、易しい教材よりも、難しい教材をやめさせるほうが難しいことが分かった。その意味でも、最初は、難しめの教材、次に、易しい教材（その際には、「易しいのも基礎体力作りとストレッチの意味で必要だから取り組もう」といった声掛けが必要だが）とすると、割に納得して易しいものにも取り組めるようだった。

また、シャドーイングのスピードは、相対的に感じるようなので、最初は、速いと思っていても、別のもっと速い教材に取り組んでから、その教材に戻ると、今度は、遅く感じるようだ。

難しければ、止めてもいい、という前提で始

めたので、学生は、難度の高いテキストを試して難しくて付いていけなくても、「今回は」だめだった、と思うようだった。そして、その難しかった教材が目標に変わり、「目指せ、〇〇〇」と、それができるよう別の易しいテキストで頑張る様子も見られた。

後期は、冬期休暇があったので、その際に、長めのテキスト(Magic Tree House #1)とCDを渡し、流し聴きでも、シャドーイングでも、読んでも良いから、と伝えた。冬期休暇中に読み終わらなかった学生も学期開始後に読み続けていた。そして、それ以降、ほとんどの学生が、音と文字の相乗効果からか、子ども用のペーパーバックに積極的に取り組むようになった。それまでは、ちょっと長い(1500字以上)と、読んでいても辛かったようだ。ただし、かなり読めるようになってくると、CDの音声はゆっくり過ぎるように感じて来る。そうなると、音なしで読んだほうがいいし、難度をあげるべきだと思われる。

また、前期も後期も同じテキスト(Mouse Tales)をシャドーイングテストに使用したことで、予想外の効果があった。この同じテキストを使用したことにより、学生たちは、前期と後期での違い、つまり、「進歩」を確かに実感することができた。学生たちは口ぐちに、前期では意味が分からないままシャドーイングをしていたけれど、今回は、しっかり意味がわかった。前回はついていくのがやっとだったけれど、今回は余裕で、ああ、こういう発音なんだ、と理解しながらシャドーイングできた、などと話していた。

③シャドーイングをできる環境づくり：
このような変化をもたらすシャドーイングでも、授業では前提条件があることも分かった。それは、「学生がシャドーイングを伸び伸びと行える環境づくり」である。シャドーイングは学生に声を出してもらわないと始まらない。そのための環境作りが大切である。

シャドーイングは最初の授業で導入をするが、その際には、日本語で、この授業での「シャドーイングのやり方」を説明するようにしてきた。そうしないと学生がどのように始めたら良いか分からないようだ。この説明のときに、正確に一言一句言わなくて良いが、CDの音をとにかく「真似」をするよう伝える。

シャドーイングは、学期の最初は、15分程度から始めたが、学期終了時には、30分~40分でも、平気で行えるようになった。

多読多聴授業では、最初の年は、多読を行ってからシャドーイングを行っていた。しか

し、多読が進んでくるとなかなか本を手放さなくなり、シャドーイングを授業開始と同時に始め、多読に移るようにした。この順番のほう時間が管理が容易になった。

この研究のシャドーイングでは、教員は学生の発音について「頭の中で思っている正確さを追わないで」という点は話したが、ひとつひとつの発音「指導」はしなかった。それも、この環境づくりの一環だった。学期開始時には、小さな声で下を向いてシャドーイングを行っていた学生も励ましほめているうちに、だんだんと声が出るようになっていった。

そして、ただの反復練習ではなく、意味のあるものに変化もしていったようだ。

シャドーイングをしている学生の様子が生かされたものから、集中したものになっていき、また、学生のコメントが、「シャドーイングは大変」から「シャドーイングが楽しい」に変わって行った。そうなると、授業外でもCDを積極的に聴くようになり、理解度も加速していったようだ。

(4) アンケート結果について：
シャドーイング教材のデータベース作成のために、各シャドーイング教材についてアンケートを実施して、感想、速度、付いていけるかどうか、内容理解、お勧め度について尋ねた。(回答数 457)

それによれば、例えば、5段階評価で、Mouse Tales の場合は、内容理解度は、3.3、お勧め度は、3.8、で、Nate the Great は、内容理解度は、3.4、お勧め度は、4.7 だった。つまり、Mouse の方が分かりやすいが、友人に勧めるのは、Nate の方が高い。Nate のほうがおもしろい、ということになる。このようなデータを集積したが、シャドーイングの難易度は、学生に評価をしてもらおうと、相対的な評価となる。つまり、あるテキストに取り組む際に、その直前に取り組んでいたテキストの影響を受けることがわかった。そうなると、絶対的な評価は非常に難しく、それをどのようにして、データベースとするか、検討課題として残った。したがって、未だインターネットには載せていない。

ここでは、本研究で使用したテキストについて簡単に述べておきたい。

基本的シャドーイングテキスト
【()内は1分間の語数で、①前半、②中間、③後半。数が多いほうが速い】

- ①Mouse Tales (①94 語、②109 語、③99 語)
- ②Nate the Great (①111 語、②151 語、③149 語)
- ③Magic Tree House #1 (①125 語、②132 語、③115 語)

この3点は、基本のテキストとして、クラス人数分のテキストとCDをそろえた。2008年度は、最初にMouse Talesのシャドーイングを行い、次にテキストを見ながらの音読・黙読を行った。Mouse Talesが早すぎる、という学生には、I Can Readシリーズから、Little Bear, DannyシリーズのCDと本を提供した。Mouseが飽きると、学生はNate the Greatに取り組んだ。Nateは学生に人気で速いが楽しい、という学生が多かった。また、英語学習者用に書かれたGraded Readers (GR)も、CDを工夫してあり、なかなか楽しくできている。学生は語彙制限があるので、却って読みやすく、シャドーイングもしやすい、ということだった。GRは、Penguin Readersの易しいレベルのCDと本や、Macmillan ReadersのCDと本、Oxford Bookwormsの本とCDを使った。また、Curious Georgeシリーズが学生には人気だった。また、Usborneシリーズも人気で易しく読めるので良かったようだ。Magic Tree Houseと同様に、Geronimo Stiltonシリーズの本とCDを気に入って楽しみ始めた学生もいた。また、様々なCD付英語絵本を購入しておいたが、学期半ばが過ぎて、変化がほしくなった頃にこれらの絵本を提供した。

(5) 普及について

酒井は多読・多聴に関するインターネットサイトを中心になって運営しているが、その他、各地で講演を行い、広く普及に努めてきた。

シャドーイング、データベースの普及活動の一環として、2008年9月20日、21日には、茨城大学において、当該科研費補助金により、茨城大学多読多聴研究会を開催した。近畿大学の高瀬敦子、順天堂大学の黛道子を招待し、講演者、ワークショップパネリストとして参加してもらった。日本国内各地から大学、高専、高校、塾の教員、一般社会人、学生など28名が集まり、研究発表を行った。また、酒井による講評、岡山・上田による当該研究のデータベースの発表やシャドーイング成果についての報告を行った。また、シャドーイング指導実演も行った。この会では、すでに、多読・多聴を授業に取り入れている教員が多く集まり、情報交換や新しい方法の模索の討論など大変有意義な会となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

①Okayama, Y. The effects of “shadowing” and extensive reading. The Japan Association for Language Teaching 33rd International Conference. 平成19年11月24日、東京都国立オリンピック記念青少年総合センター。

②上田敦子、多読授業の実践報告、日本多読学会、平成19年8月12日、東京SEG。

③ Nakanishi, T., & Ueda, A. The interaction effects of extensive reading, 6th Asia TEFL International Conference. August 2, 2008. Bali, Indonesia.

[図書] (計1件)

①酒井邦秀、さよなら英文法！多読が育てる英語力(ちくま学芸文庫)、筑摩書房、平成20年11月10日。

[その他] (計3件)

①岡山陽子・上田敦子、科研プロジェクト報告、茨城大学多読多聴研究会、平成20年9月20日。

②上田敦子・岡山陽子、茨城大学における多読的シャドーイングの実践、多読・多聴授業研究会、平成21年3月7日、愛知県豊田市豊田工業高等専門学校。

③酒井邦秀、多読のきのう、きょう、あした、多読・多聴授業研究会、平成21年3月7日、愛知県豊田市豊田工業高等専門学校。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡山 陽子(OKAYAMA YOKO)
茨城大学・大学教育センター・准教授
研究者番号：20396592

(2) 研究分担者

上田 敦子(UEDA ATSUKO)
茨城大学・大学教育センター・准教授
研究者番号：30396593

(3) 研究分担者

酒井邦秀(SAKAI KUNIHIDE)
電気通信大学・電気通信学部・准教授
研究者番号：80092609